

## 陶淵明「擬古」九首其一の表現手法と寓意について

著者	沼口 勝
著者別名	NUMAGUCHI Masaru
雑誌名	中国文化：研究と教育：漢文学会会報
巻	50
ページ	65-77
発行年	1992-06-20
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00150109">http://doi.org/10.15068/00150109</a>

# 陶淵明「擬古」九首其一の表現手法と

## 寓意について

沼口 勝

ければ、作者の寓意にたどりつくことはできない。実に晦  
波な詩である。

陶淵明（三六五―四二七）の「擬古」九首は、晦渋な作  
品として古來定評がある。従來の諸家の解釈に加え、近年  
の研究の進捗により、この連作の寓意の一角が、漸くその  
輪廓を現しはじめたようである。

しかし、九首中には、その寓意の解明において、依然と  
して曖昧模糊たる段階にとどまっている作品がある。その  
最もはなはだしい例が、「榮榮たり窗下の蘭」の句で詠い  
おこす其一の詩である。

わたくしの考察によれば、これは、表現上きわめて巧緻  
な工夫を凝らした作品である。擬装のために仕組まれた言  
葉の迷路が、解釈の行く手を遮るのである。まことらしく  
見えるうそとうそらしく見えるまことと、それを見分けな

小論において、わたくしはまず、「擬古」其一と「古詩  
十九首」中の三首の作との関連性と、その表現手法上の意  
味とを明らかにしたい。次いで、この詩の解釈上のキー・  
ワード（隠語）について、その典拠・用法を考察し、それ  
を手懸りとして作者の寓意の解明を試みようと思う。

## 二

陶淵明の「擬古」九首に先行する同類の作品の一つとし  
て、『文選』（卷二十九「雜擬」）に採録されている晋の陸  
機（二六一―三〇三）の「擬古」（『文選』は「擬古詩」と  
する）十二首がある。陸機の「擬古」は、例えば「擬行行  
重行行」「擬今日良宴會」などと題することでも明らかにな

うに、いずれもみな「古詩十九首」を中心とする、古詩の特定の一首を対象とする擬作である。これに対し、陶淵明の「擬古」の場合、いかなる作品を摸擬したのか、その対象を指定することが困難である。その理由の一つとして、作者の摸擬した古詩の作品が、あるいはすでに失われて不明であるということがあるかも知れない。しかし、他にも理由はあるはずである。わたくしの見るところでは、九首中の幾首かは、複数首の古詩の主題・内容・表現などをモザイク様に組み合わせた詩のようである。次に取りあげるように、「擬古」其一は、「古詩十九首」中の三首の詩を摸擬対象とするようであるが、その摸擬のしかたは、かなり緩やかなものと言えよう。以下、まず、その点について考察を加えたい。

「擬古」九首其一の詩

榮榮窗下蘭 榮榮たり 窗下の蘭  
密密堂前柳 密密たり 堂前の柳  
初與君別時 初め君と別れし時  
不謂行當久 謂はざりき 行當に久しかるべしとは  
出門萬里客 門を出でて萬里の客たり  
中道逢嘉友 中道にして嘉き友に逢ふ

未言心先醉 未だ言はざるに心先づ醉ふ  
不在接杯酒 杯酒を接するには在らず  
蘭枯柳亦衰 蘭は枯れ 柳も亦た衰ふ  
遂令此言負 遂に此の言をして負かしむ  
多謝諸少年 多謝す 諸少年  
相知不忠厚 相知 忠厚ならざりき  
意氣傾人命 意氣 人命を傾くとも  
離隔復何有 離隔せば 復た何か有らん

右の詩の大意を述べると、冒頭から第十句までは、春、夫を旅に送り出した婦がその帰りを待つ、しかし、夫は途中で「嘉友」と逢い、その人に心酔して付従って行き、秋が来ても婦のもとに帰らない、という話、そして、第十一句以後末尾四句は、語り手が「諸少年」に対し、いかに親愛な仲であろうとも、誠実でなければ、命を傾けるかのような意気込みの交際も、いったん隔たると、友情のかけらも残らないことを戒めることは、と解される。なお、婦と語り手（＝作者）と、また夫と「諸少年」とは同一の人物、いわば一人二役を演じているものと解釈する。

しかし、以上の解釈は一私見にすぎず、右の詩がさまざまに異なる解釈を生む余地をもつことは、すでに諸家の注

解がこれを明らかに語っている。一例をあげれば、鈴木虎雄『陶淵明詩解』<sup>(1)</sup>は、旅に出た者が家にとどまる者へ語りかける言葉として解し、また、松枝茂夫・和田武司『陶淵明全集』<sup>(2)</sup>は、家にとどまる者から旅に出た者への言葉として解している。このように互いに対立する解釈を許容するという現象こそ、まさに古詩的であり、古詩を摸擬することから賦与された性質の表れと言えよう。それでは、「擬古」其一と古詩との具体的関連は、どうであろうか。それを以下に見ることとしたい。

「古詩十九首」其二「青青河畔草」の詩は、陶淵明が摸擬しようとした古詩の一つではないかと思われる。

青青河畔草	青青たり	河畔の草
鬱鬱園中柳	鬱鬱たり	園中の柳
盈盈楼上女	盈盈たる楼上の女	
皎皎當牕牖	皎皎として牕牖に當たる	
娥娥紅粉粧	娥娥たる紅粉の粧 <small>まゆげ</small>	
織織出素手	織織として素手を出す	
昔爲倡家女	昔は倡家の女爲り	
今爲蕩子婦	今は蕩子の婦爲り	
蕩子行不歸	蕩子 行きて歸らず	
空牀難獨守	空牀 獨り守るは難し <small>かた</small>	

旅に出て帰らぬ夫を待つ婦の嘆きを詠う詩の例は、古詩中に多く見出すことができる。しかし、「擬古」其一と同じく、冒頭に「青青」「鬱鬱」という疊語を用いた、草木の茂るさまをいう二句を据えて詠いおこす詩は、「青青河畔草」だけのようである。この詩の、河畔の草・園中の柳という景は、春、牕牖に當たる楼上の女の遣り難い孤独の情を表すものである。陶淵明の詩の「榮榮窗下蘭・密密堂前柳」という二句も、春、夫を旅に送り出した婦の孤独の情を暗示したものと解することができる。

摸擬対象としたのではないかと思われる第二は、「古詩十九首」其一「行行重行行」の詩である。冒頭四句と後半八句を示す。

行行重行行	行き行き重ねて行き行く
與君生別離	君と生きながら別離す
相去萬餘里	相去ること萬餘里
各在天一涯	各 <small>おのづか</small> 天の一涯に在り
(略)	
相去日已遠	相去ること日に已に遠く
衣帶日已緩	衣帶 日に已に緩し
浮雲蔽白日	浮雲 白日を蔽ひ
遊子不顧反	遊子 顧反せず

思君令人老 君を思へば人をして老いしむ

歲月忽已晚 歲月 忽ち已に晩れぬ

棄捐勿復道 棄捐して復た道ふこと勿けん

努力加餐飯 努力して餐飯を加へよ

右の詩と「擬古」其一とを比較して、三点において似て

いることに気づく。第一は、「生別離」「萬餘里」という言

葉が、「與君別」「萬里客」の語に近似すること。第二は、

「浮雲白日を蔽ふ」という隠喩により暗示された、旅の途

中での事故の出来と、陶淵明の詩における「中道にして嘉

き友に逢ふ」と詠う事件の発生との間の近似性、さらに第

三は、兩詩ともに「君」と呼ぶ対象が、とどまる側の婦を

指すのか、また旅に出る側の夫を指すのかにわかには定め

難いという、シチュエーション設定の曖昧性である。これ

ら三点の近似性から判断すると、「行行重行行」の詩は、

陶淵明の「擬古」其一の摸擬対象と認定することができる

であろう。

ところで、「擬古」其一の末尾四句は、誠実さに欠ける

交友には、裏切りが伴うものであることを言及していた。

古詩の中でこうしたことを述べる作品として、「古詩十九

首」の其七「明明皎夜光」の詩をあげることができる。全

十六句の詩の後半部を掲げよう。

昔我同門友 昔 我が同門の友

高擧振六翮 高く擧がりて六翮を振るふ

不念攜手好 手を携へし好を念はず

棄我如遺跡 我を棄つること遺跡の如し

南箕北有斗 南に箕あり 北に斗有り

牽牛不負軛 牽牛も軛を負はず

良無盤石固 良に盤石の固さ無くんば

虛名復何益 虛名 復た何の益かあらん

右の詩の末尾二句は、盤石のごとき固い不変の誠実さが

なければ、旧友とは名ばかりで何の足しにもならない、と

いう嘆きの言葉である。これは、「擬古」其一に言う意に

ひとしい。

以上、陶淵明の「擬古」其一が摸擬対象としたのではな

いか、あるいは、そこから着想を得たのではないかと考え

られる「古詩十九首」中の作三首をあげた。作者は、これ

らの詩の主題・内容・表現などをかなり自由に自由に用いな

ら、「擬古」其一という擬作を作りあげたのだと考えられ

る。そして、もしそうだとすると、作者の擬作の関心は、

古詩を摸擬すること自体にあると言うよりは、他の狙い、

すなわち自身の寓意をそれに託すというようなことにあつ

たのではないであろうか。古詩は古楽府から誕生したとき

れている。それだけに楽府的な、さまざまなシチュエーションを包含する寛容さをその特質とし、寓意を託す擬作対象として恰好な詩体であったと思われる。

それでは、陶淵明が、三首の古詩を素材として、一種の詩的デフォルメ (deformer) を着想したのは、いったいどのような寓意のためであったのか、次にその点について究明することとしたい。

### 三

「擬古」其一の寓意を解くキー・ワードの第一は、第六句「中道にして嘉き友に逢ふ」という、その「嘉友」である。

「嘉友」という言葉は、清の『佩文韻府』に採録されているが、その典拠とされるのは陶淵明のこの句のみである。このように使用されることの稀な言葉を、陶淵明はなぜ用いたのか。例えば「良友」「善友」「好友」などという言葉では、この場合ふさわしくないというのであろうか。

「嘉友」とは、陶淵明の造語ではないのか。もしも、造語であるとする、何かよほど重要な意味が託されているのではないであろうか。というようにさまざまな疑念が生じて当然だと思われるが、管見の及ぶところ、従来その疑念

を解こうとした者はいなかったようである。

一わたくしの調査によると、「嘉友」は陶淵明の造語ではなく、典拠が存した。漢の昭帝・宣帝の時の人焦延寿、字は贛の著『焦氏易林』がそれである。

周知のように、『焦氏易林』十六巻は、四千九十六首の繇辞を撰集した書である。その繇辞中には前後重複するものがはなはだ多く、ある卦における繇辞がそのまま他の卦に用いられているもの、また、一繇辞中の一句ないし二三句が他の卦に重出しているものもある。重出の頻度は、再出、三出、四出、五出、六出、七出、八出、多きは九出に達するものもあるという。<sup>(3)</sup>

「嘉友」の語は、次の二種五首の繇辞を典拠とする。

[A<sub>1</sub>] 初憂後喜、與福爲市、八佾八列、飲御嘉友。(巻一、坤之小過)

[A<sub>2</sub>] 初憂後喜、與福爲市、八佾列陳、飲御嘉友。(巻二、訟之坎。巻五、蠱之小畜)

[B<sub>1</sub>] 南國盛茂、黍稷醴酒、可以享老、樂以嘉友。(巻四、大有之同人)

[B<sub>2</sub>] 南國盛茂、黍稷醴酒、可以饗養、樂以嘉友。(巻十一、夬之离)

繇辞[B]がいかなる典拠をもつものであるのか、未詳であ

る。しかし、繇辭[A]の典拠については、その「飲御嘉友」という句法から類推し、『詩』小雅「六月」の第六章の「飲御諸友」の句と関連をもつものであるかと想到することができる。繇辭と「六月」と、相互の比較考察は後に譲ることとし、結論を先取るならば、繇辭[A]は「六月」を典拠とし、「嘉友」の語は、「六月」の「諸友」を言い換えたものである。「六月」を典拠とする繇辭は、『焦氏易林』中に三種五首が存する。

[C<sub>1</sub>] 曳綸江海、釣挂魴鯉、王孫利得、以饗仲友。(卷二、霏之損)

[C<sub>2</sub>] 曳綸河海、釣挂魴鯉、王孫利得、以饗仲友。(卷十四、豐之坤)

[D<sub>1</sub>] 六月采芑、征伐無道、張仲方叔、剋勝飲酒。(卷八、離之大過)

[D<sub>2</sub>] 六月采芑、征伐無道、張仲方叔、剋敵飲酒。(卷十六、小過之未濟)

[E] 獫狁非度、治兵焦穫、伐鑄及方、與周爭疆、元戎其鴛、喪及夷王。(卷十六、未濟之睽)

『焦氏易林』の繇辭は、『詩』『書』『易』『左伝』『国語』などを典拠とするものがあるが、その他に、それらの句を混じえたもの、さらに、典拠不明のものなどが混在してい

る。したがって、次に示す例のごとく、小雅「小宛」を典拠とすると見られる繇辭に、「飲御諸友」という「六月」の句を混用していたり、「飲御嘉客」という、繇辭[A]に似た文の一句をもつものがあるなどの現象が見られるのである。

[F<sub>1</sub>] 中原有菽、以待饗食、飲御諸友、所求大得。(卷三、小畜之大過)

[F<sub>2</sub>] 中原有菽、以待雉食、飲御諸友、所求大得。(卷四、豫之萃)

[G] 江河海澤、衆利室宅、可以富有、飲御嘉客。(卷一、屯之遯)

「六月」は、「出車」「采芑」とともに、宣王の征伐を詠う詩である。『焦氏易林』は三家詩の齊詩説に拠ることが知られているが、その齊詩説によると、この詩は、「宣王師を興して將に命じ、獫狁を征伐し、詩人其の功を美とし大とす。」という。そこにいう「將」とは、宣王の宰相尹吉甫のことである。また、「小序」は、「六月は、宣王北伐するなり。」という。次に、「六月」の第一章と第六章を示す。

[一] 六月棲棲 六月棲棲たり  
戎車既飭 戎車既に飭む

四牡駸駸 四牡駸駸たり

載是常服 是の常服を載す

玁狁孔熾 玁狁孔だ熾んなり

我是用急 我是を用て急なり

王于出征 王は于に出で征す

以匡王國 以て王國を匡ただせと

吉甫燕喜 吉甫さかもり燕たの喜むしみ

既多受祉 既さに多く祉を受く

來歸自鎬 鎬より來歸す

我行永久 我が行永く久し

飲御諸友 飲すませて諸友に御すめ

魚鱉膾鯉 鱉にをなます鯉を膾にす

侯誰在矣 侯れ誰か在る

張仲孝友 張仲孝友なるあり

鄭箋によれば、第六章は、玁狁を伐ち帰還した吉甫が、天子から燕礼を賜り、多く賞賜を受け、またその宴に諸友恩旧の者を招き、喜びとともにしたことを詠うものという。さらに、張仲について、毛伝・鄭箋は、吉甫の友であり、征伐の間、留守をつとめた賢臣であるとする。

右に見た、玁狁の侵入に対する憂慮、吉甫の征伐と凱旋、そして天子から燕礼と賞賜を受け、張仲らの諸友との

宴飲喜樂を詠う「六月」の内容と、「初に憂へて後に喜ぶ、福を興ふるを市と爲せ、八佾八列あり（八佾列陳す）、飲ませて嘉友に御めん」という繇辭[A]の内容とは、まさに一致するのである。

以上を要するに、陶詩の「嘉友」の語は、繇辭[A]「初憂後喜」に拠っているが、繇辭そのものが「六月」を典拠としているから、「嘉友」も「諸友」の意であると考えられるのである。なお、同じく「嘉友」の語を用いる繇辭[B]「南國茂盛」は、擬装典拠として真の典拠を人の目から隠蔽する効用を、作者により荷わされているのである。

陶淵明が、「諸友」の語を用いず、「嘉友」の語に代えた理由は、「擬古」其一が「六月」の意に擬していることを隠蔽し、その寓意の所在を人に覺らせないことにある。「嘉友」と「諸友」、「不謂行當久」と「我行永久」、そして「相知不忠厚」と「張仲孝友」という用語の接近が語っているように、「擬古」其一の真の摸擬対象は、実は「六月」だと言えるのである。

それでは、「嘉友」とは誰を指しているのか。また、「擬古」其一の寓意の内容は何か。それらについて論じたい。

「六月」と似たシチュエーションを晋末に求めると、劉裕の北伐からの凱旋がそれに該当するであろう。



史書の記載によれば、北伐に成功した劉裕は封城（江蘇省徐州）にとどまっていたが、義熙十四年（四一八）六月、その地で、相国・宋公・九錫の授与を受け、宋国が発足した。孔靖が宋国の尚書令に、王弘が同じく尚書僕射に、傅亮と蔡廓が侍中に、謝晦が右衛將軍に、鄭鮮之が奉常卿に、殷景仁が秘書郎に任ぜられた。翌、元熙元年（四一九）七月、劉裕の爵位は、宋公から宋王に進められた。そして、永初元年（四二〇）六月、晋の恭帝の禪りを受けて即位、宋朝が誕生した。<sup>5)</sup>

義熙十四年と永初元年との、この二回の六月は劉裕と彼のブレインたち、また、晋朝側に立つ人々にとり、忘れることのできぬ特別な意味をもつ時間であった。陶淵明がその「擬古」其一で述べようとした寓意は、北伐の成功から即位に至る劉裕の篡奪の過程に関するものであった。そして、「嘉友」とは、劉裕のブレインたち、ことに王弘、傅亮、謝晦などを指すのではないか。彼らこそ東晋王朝を支えた大貴族の後裔であり、まさに「嘉友」の名にふさわしい存在である。

例えば、王弘について見ることにしよう。王弘は、東晋王朝創建の柱石であった宰相王導の曾孫、劉裕が鎮軍であったとき幕下に参じ、北征に従い、前鋒がすでに洛陽を平

げると、劉裕の意を受け九錫授与を要請する使者として封城から建康に派遣された。劉裕が即位し、宴集して群公に「我れ布衣のとき、始めの望みは此に至らず」というと、傅亮らの徒がみな盛んに功德を称した。そのとき、率爾として、「此れ所謂天命にして、之を求むるも得可からず、之を推せども去る可からず」と答え、時人を感嘆させたという。義熙十四年、江州刺史として潯陽に赴任、陶淵明に酒を贈った故事で名高い。<sup>6)</sup>このように見るならば、王弘を「嘉友」の語にふさわしい人物に擬するのは、必ずしも牽強付会ではないであろう。

「擬古」其一の寓意を解く第二のキー・ワードは、「中道にして嘉き友に逢ふ」の句の「中道」という言葉である。実はこの語もまた、『焦氏易林』に典拠をもつものである。次に示そう。

[H<sub>1</sub>] 同載共興、中道分去、喪我元夫、獨爲孤居。（卷二、比之革）

[H<sub>2</sub>] 同載共興、中道別去、喪我元夫、獨與孤居。（卷五、隨之比）

[H<sub>3</sub>] 同載共車、中道別去、爵級不進、君子不興。（卷七、大畜之小過）

右の繇辭の中、[H<sub>1</sub>]・[H<sub>2</sub>]の二首が「擬古」其一と関わるも

のであろう。「同に載せて輿を共にすれども、中道にして別れ去れば、我が元夫を喪ひ、獨り輿に孤居せん。」とは、車に乗せさせるほど信頼していた臣下が、途中別れ去ってしまい、わが元き夫を失って、孤独な生活をしている、という意味かと思う。とすると、「中道にして嘉き友に逢ふ」という句の真意は、右の繇辭を踏まえて解したとき、中道で逢った嘉友が、その見かけ上のりっぱさと裏腹な、とんでもない食わせ者であったことを諷刺していることになるのではなからうか。

それでは、次にその夫とは誰を指しているかということを考えなければならぬ。旅に出る夫とは、詩の後半でいう「諸少年」であろう。この「諸少年」の語が、第三のキ・ワードである。

「諸少年」とは、多くの少年の意であるが、その「諸」という語感に、軽侮、また軽侮から生ずる親近の意が含まれているようである。晋宋時代の詩歌中の用例を検すると、みな舞曲の歌辭であることが知られる。

[I<sub>1</sub>] 人言揚州樂 人は言ふ 揚州は樂しと

揚州信自樂 揚州は信に自ら樂し

總角諸少年 總角の諸少年

歌舞自相逐 歌舞して自ら相逐ふ

(邊欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』晉詩卷十九、清商曲辭、「翳樂」)

[I<sub>2</sub>] 生長石城下 石城の下に生長す

開窗或作門對城樓 窗を開けば城樓に對す

城中諸少年或作美少年 城中の諸少年

出入見依投 出入 依投せらる

[I<sub>3</sub>] (同右、宋詩卷十一、清商曲辭、「石城樂」)

歌舞諸少年玉臺作少年 歌舞す諸少年

娉婷無種迹 娉婷として種迹無し

菖蒲花可憐 菖蒲 花憐む可し

聞名不曾識 名を聞きしも曾て識らざりき

(同右、宋詩卷十一、清商曲辭、「烏夜啼」)

[J] 右の諸例の「諸少年」は、いずれも遊び好きの若者たちをいい、彼らを迎える妓女たちを、「諸女兒」と呼ぶのと一對の言葉である。

朝發襄陽城 朝に襄陽城を發し

暮至大隄宿 暮に大隄の宿に至る

大隄諸女兒 大隄の諸女兒

花豔驚郎目 花のごとく豔にして郎が目を驚かさん

(同右、宋詩卷十一、清商曲辭、「襄陽樂」)

「諸少年」の語が、輕薄で未熟な若者たちを意味すると

するならば、「擬古」其一におけるそれは、誰を指すもの  
と考へるべきか。わたくしはそれを、晋末の二帝、即ち安  
帝・恭帝を指すものではないか、もしくは、これに孝武帝  
を加えた三帝を指すものとしてもよいかと推論する。

孝武帝（司馬曜、三七二—三九六在位）は十歳で即位、  
三十五歳で変死、安帝（徳宗、三九六—四一八）は十五歳  
で即位、三十七歳で扼殺、そして恭帝（徳文、四一八—四  
二〇）は三十四歳で即位、一年六カ月後、扼殺された。孝  
武帝は酒乱、安帝は生来白痴、そして恭帝は劉裕の即位の  
ために供された犠牲でしかなかった。

前述したように、「嘉友」を王弘以下の劉裕のブレーン  
たちと解するならば、「諸少年」に安帝・恭帝を当てるこ  
とができよう。また、「嘉友」を晋朝を支えてきた貴族た  
ちと広義に解するならば、王室の衰弱を招いた孝武帝を加  
えるべきかと考へる。

「擬古」其一は、暗愚未熟な晋末の天子たちが、王弘・  
傅亮らに代表される、晋室を支えてきた貴族らの一党に欺  
かれ、ついに禅代に追いこまれる運命になったことを悼ん  
だ詩であると論定できるであらう。

ここで、従来の諸説につき、若干の検討を加えたい。  
まず、元の劉履は、次のようにいう、

[K]

比なり。君は晋の君を謂ふ。（略）靖節幾を見てたち、  
建威參軍より、即ち求めて彭澤の令と爲るも、未幾も  
なくして歸を賦す。晋宋易代の後に及ぶや、終身仕へ  
ず。豈に在朝の諸親舊の或は之に諷勸する者有り、故  
に此の詩を作り以て意を寄するか。言うところは、蘭  
と柳と本と皆衰へ易きの物、猶且つ榮茂すること此く  
の如し。以て晋室弱しと雖も、尙其の爲す有らんこと  
を望む可し。故に我初めて君と別るるの時、自らは久  
しく外に違ると謂はず。但だ一たび門を出で、即ち遠  
客と爲り、且つ嘉友に逢ひ、同心相親しんで、遂に留  
る所に迷ふ。況んや今蘭は枯れ柳は衰ふるに至れば、  
望む所の者も絶え、我が初心をして既に負かして意  
向已に決然たり。然して諸子に多謝す、我が離隔する  
こと既に久しくして、猶念ひを動かす所有りと以はざ  
るは莫し、是れ何ぞ相知ることの忠厚ならざらんや。  
若し能く意氣傾倒し、深く吾が憂國の誠・出處の義を  
體せば、則ち離隔の念を知るも、復た何か有らんや。  
語意の含蓄、讀者之を詳にせよ。

劉履は、新王朝に仕えた友人たちが出仕を勧めるのに対  
し、謝絶する意を託したものと解する。君は晋の天子を謂  
うとする点は、私見にひとしい。しかし、旅立つ者が作者

であると、「諸少年」を友人たちと解し、「諸子」と言い換えている点が、私見と異なる。「擬古」其一を、晋宋易代に際しての作者の意を寓する詩であるとする、その解釈の方向性については妥当なものと言えよう。しかし、解釈の要所は、やはり「嘉友」の語の寓意は何かということにあるようである。その意味で、「嘉友」の語の典拠としての『焦氏易林』の、この詩の解釈上にもつ意義は大きい。

次に、近年発刊された諸論中、呉雲・唐満先・魏正申の諸氏の解釈を列挙しよう。

[L] 在《擬古》诗中，讴歌节义者还有第一，八两首。第一首，作者通过出游负约，远行不归的事迹，谴责了时人轻易妄从，不守节义。（吴云「《擬古》诗九首浅论」）<sup>(9)</sup>  
这一首，写少年离家时，与兰，柳相约；不会离别很久。但少年外出后结交了新朋友，便留恋忘返，致使兰枯柳衰，有负前约。所以兰，柳指斥少年：“相知不忠厚”。这首诗用拟人的手法，写这样一个故事，用意当是奉劝那些外求求仕的少年勿受外界的诱惑，应该及早归来隐居。亦有人说，本诗是讽刺那些当初与作者相约隐居而后改节仕宋者。（唐満先『陶淵明集浅注』<sup>(10)</sup>）

[N] 与第二首相类的还有第一首，以无君论的思想高度批判封建时代交往中背约失信，轻易妄从的衰薄轻率；……

（魏正申「《擬古》诗九首探究」<sup>(11)</sup>）

右の三氏の見解もまた、「嘉友」の語の寓意に明晰な解釈を加えることができなかったために、詩の真意を掬いかねているように見えるのである。

以上の考察により、陶淵明が「擬古」其一の詩で試みた寓意は、実は『詩経』小雅「六月」に詠うシチュエーションを借りて、晋宋易代の際の、晋室に対する勢要の者の裏切りを言うものであることが明らかとなった。

ところで、ここに見られる、今をもって古に託すという手法は、魏の阮籍（二一〇—二六三）の四言『詠懷詩』でも確認され、決して稀な例ではない。しかし、そうした発想を、彼らがどのような径路で学んだのか、ということとは問題とするに値するであろう。それに対する一つの解答として、わたくしは次の文章を提示したい。

成して上に比するとは、古と徒と為るなり。其の言は教誨の実ありと雖も、古の有なり。吾が有に非ざるなり。然るが若き者は、直なりと雖も、病と為らず。是れを古と徒と為ると謂ふ。（『莊子』人間世篇）

周知のように、これは、顔回が暴君を説得する術について自ら考えるところを、孔子に説明するくだりで、衛の荘公の暴政下に呻吟する民を、顔回が救おうとする寓話中の

一節である。

「成して上に比する」とは、「自分の意見を述べ、教化の成果をあげながらも、そのことばだけは昔の人から借りる」ことだという。即ち、上古の故事に託し自分の意見を言うことで、これは「古（人）と徒なまとなる」と同じであるから、たとえそれが率直な意見であっても、相手からとがめられる恐れがないという考え方である。「詠懷詩」や「擬古」其一が、婉曲にはあるが、その意を『詩経』に託す方法と、『莊子』中の、顔回の言葉を借りて語られる説得術とは、通底するものがあると思う。

阮籍と陶淵明と、彼らはいずれも『莊子』に通曉する人たちであるだけに、「古と徒と為る」術を熟知していたにちがいない。彼らの共通の方法に、『莊子』がヒントを与えていたと推測するのは、あながちに極論とは言えないように思う。

#### 四

陶淵明の「擬古」九首其一是、晋宋易代の際、劉裕に加担し、晋の天子たちを欺いた、貴族たちの無節操と、欺かれた天子たちの軽佻愚昧さとを諷諷し、そこに晋室滅亡に對する哀悼の意を表した詩である。作者は、彼の眼前にお

いて演じられたドラマのような篡奪の経過を、『詩経』の小雅「六月」に詠われる、玁狁征伐から凱旋した尹吉甫が、その諸友と燕飲する場面になぞらえて詠おうとした。しかし、詠う内容が時事や勢要の者に關することであり、「六月」を摸擬した形跡は、これを隠す必要があった。その隠蔽のための方法として、「六月」の「諸友」の語を、『焦氏易林』中の、「六月」を典故とする繇辭に用いる「嘉友」の語に代え、そのうえ、詩のスタイルを一種の「古詩十九首」のモザイク風に仕立てあげ、擬装したのである。したがって、摸擬という点から言えば、眞の摸擬対象は「六月」であり、「古詩十九首」は仮りの、または、副次的摸擬対象と考えるべきであろう。また、『詩経』の詩の内容や表現になぞらえつつ、しかも巧妙に擬装して時事を諷諷する、右の方法は、阮籍の四言「詠懷詩」のそれを繼承するものである。

なお、陶淵明が、その詩の表現の典故として『焦氏易林』を用いていたということが考えられるならば、その「飲酒」という詩題も、『詩経』小雅の「六月」「采芣」を典故とする『焦氏易林』の繇辭[D]と關係があるように思われる。しかし、それについては、機会を改めて論ずることとしたい。

註

- (1) 昭和二三年 弘文堂。
- (2) 一九九〇年 岩波文庫。
- (3) 鈴木由次郎『漢易研究』（昭和三八年明德出版社）の「第三部 焦氏易林の研究」四三一頁以下参照。
- (4) 〔清〕王先謙『詩三家義集疏』卷十五参照。
- (5) 『資治通鑑』卷百十八「晉紀」四十、『宋書』卷二「本紀第二、武帝・上」など参照。なお、吉川忠夫『劉裕』（中國人物叢書3、一九六六年 人物往来社、一九八九年 中公文庫）は、劉裕の晋朝篡奪の過程を生彩ある筆致で描き出して参考となる。
- (6) 王弘の事迹については、『宋書』卷四十二「王弘伝」、『晋書』卷九十四「隱逸、陶潛伝」参照。
- (7) 「同載共輿〔車〕」は、君が臣下と同じ車に乗ること。『史記』の「陳丞相世家」に、漢の高祖が陳平を参乗として取り立てたのを、諸将が「同載」させたと怨んだのにもとづく。「元夫」は、行いの正しい人・善士の意。「嘉友」と意味が近いことに注意。
- (8) 『風雅翼』卷五「擬古」五首（『四庫全書』集部所収、上海古籍出版社）
- (9) 『陶淵明論稿』（一九八一年 陕西人民出版社）所収。
- (10) 一九八五年 江西人民出版社。
- (11) 『陶淵明探稿』（一九九〇年 天津出版社）所収。
- (12) 『阮籍の四言の「詠懷詩」十三首其一の詩において、『詩経』
- 幽風「東山」の語句を用い、周公が淮夷の叛乱を討伐凱旋したことに託して、司馬昭が淮南に抛る諸葛誕の叛乱を討伐凱旋したことを詠う例がある。拙稿「阮籍と『詩経』—四言「詠懷詩」を例として—」（一九八五年 『漢文学会会報』第四三号）
- (13) 森三樹三郎訳注『莊子』（内篇）（一九七四 中公文庫）九六頁参照。
- (14) 拙稿「阮籍の四言『詠懷詩』について—その修辭的手法を中心として—」（昭和六一年 『日本中国学会報』第三十八集）参照。

（文教大学）